

#### (15) 無私の人・人間蔑視者（「或る反時代的人間の偵察行」の15）

人間を研究し「人間を知る人」がいる。彼は些細な利益あるいは大きな利益を得ようと研究する策士である。それから、また別の「人間を知る人」がいる。彼は自分のためには何も望まず、「偉大な『無私の人』(ein grosser „Unpersönlicher“）」と呼ばれる。しかし、よく観察すると、この人は「もっとたちの悪い利益」を得ようとしている。彼は自分を人々より「優越している」と感じ、かれらを「見下ろし」、自分を彼らと混同してほしくないと思っている。この「無私の人」は「人間蔑視者(ein Menschen-Verächter)」である。

#### (16) カントの裏口哲学（「或る反時代的人間の偵察行」の16）

ドイツ人の「心理的感覚」の例として次のものがある。すなわち、一つはドイツ人がカントとその「裏口哲学(Philosophie der Hinterthüren)」について掴み損ねているということである。カント哲学は「知的誠実さの典型」ではない。

また、もう一つの例は「いかがわしい『と(und)』」である。ドイツ人は「ゲーテとシラー」と言う。彼らがさらに「シラーとゲーテ」と言うことが危惧される。彼らはシラーを知らないのだ。これよりも、さらにもっとひどい「と」は「ショーペンハウアーとハルトマン」である。

#### (17) 最も痛ましい悲劇としての生（「或る反時代的人間の偵察行」の17）

「最も精神的人間たち」は、彼らが「最も勇氣ある人間」であるならば、「最も痛ましい悲劇」を体験する。彼らは、「生」が彼らに「最大の敵意」を差し向けるゆえにこそ、「生」を尊敬する。

#### (18) 純粋な偽善（「或る反時代的人間の偵察行」の18）

今日、「純粋な偽善(die echte Heuchelei)」ほど稀なものはない。「偽善」は「強い信仰の時代」のものである。「強い信仰の時代」にはもっている「信仰」を手放すことはない。しかし、今日では人々は簡単にそれを手放してしまう。したがって、今日では以前よりはるかに多くの「信念(Überzeugungen)」が可能である。「可能である」ということは「許されている」ということであり、「無害」であるということである。

ここから自分に対する「寛容」が生まれ、それは様々な「信念」を許容する。今日では、これらの「信念」は互いに折り合いをつけ、共生し、互いに「迷惑を掛けない」ように用心している。「迷惑を掛ける(sich compromittieren)」というのは、「一直線に進むこと」であり、「純粋」であることである。「近代人」は「悪徳」を冒すことに「余りに怠惰(zu bequem)」であり、それは滅び去ってしまうのではないかと危惧される。すなわち、「悪」は「強い意志」を必要とするが、それは現代の「生ぬるい空気」のなかでは「退化」し、「徳」にすらなっている。今日の「偽善者」は数少ないが、「偽善」の真似をしているだけであり、彼らは「俳優」である。